

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 9 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00983

研究課題名(和文)「移動」をキーワードとした渡来人研究の再構築

研究課題名(英文)Reconstructing the study of TORAIJIN with "movement" as a keyword

研究代表者

田中 史生(TANAK, FUMIO)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：50308318

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本古代の渡来人に関する研究は、従来の帰化人研究における問題関心を継承し、移民史研究として発展した。ここで重視されていたのは、国民史としての日本人論の構築である。本研究は、古代の渡来人を移動者と再定義することによって、国民史の克服を課題とする日本史学において、渡来人研究の再構築を目指した。本研究によって、これまで論争のあった「帰化」の概念の成立時期は、7世紀後半であることをほぼ確定できた。また古代史料の「帰化」には、日本列島への定住を目的としない移動者が多く含まれていたことも明らかにした。これにより、渡来人を国際的な移動者として研究することの有効性を具体的に示すことができたと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の渡来人研究には、国民史としての視角や前提が強く存在している。しかしこれまで、その問題性について自覚的に議論されたことはほとんどない。「帰化人史観」の克服を掲げて構築された渡来人研究は、帰化人研究が提起してきた帰化人像に未だ縛られているといえる。けれども、国民史と近代ナショナリズムの密接な関係性や、多様な歴史から国民史を切り取る近代の恣意性が様々に指摘される今、歴史学としての日本史研究には、国民のルーツ探しを越えて、現代「日本」を相対化し問い直す多様な「日本」史の解明が求められている。本研究によって、こうした新たな“現在の課題”に応えうる研究視点と、それに基づく実証的な研究を示した。

研究成果の概要(英文)：Research on ancient Japanese TORAIJIN(渡来人) has developed as a study of the history of KIKAJIN(帰化人), continuing the problems and concerns of traditional studies of naturalization. What was emphasized here was the construction of a theory of the Japanese people as a national history. The purpose of this study is to overcome national history by conducting research on ancient TORAIJIN with "movement" as the keyword. Through this research, we were able to establish the date of establishment of the concept of "KIKAJIN," which has been disputed, to be in the latter half of the 7th century. We have also clarified that "KIKAJIN" in ancient historical records included many migrants who did not intend to settle in the Japanese archipelago. I believe that I have concretely demonstrated the effectiveness of studying migrant peoples as international migrants.

研究分野：日本古代史

キーワード：渡来人 帰化人 流来 海商 渡来系移住民 渡来系氏族

1. 研究開始当初の背景

日本古代史における渡来人の研究は、学術用語として1960年代まで一般的に用いられていた「帰化人」を古代史料から批判し、「帰化人史観」の克服を訴えて発展した。一方で、従来の「帰化人」研究の国民史的な移民史研究としての視座や問題関心は継承された。けれども古代史料の「渡来」の語には移住の意味がない。渡来人研究は、「渡来人」の語が史料の実態と異なることに気づきながら、「帰化人」像に縛られた議論を展開してきたのである。

しかし、国民史と近代ナショナリズムの密接な関係性や、多様な歴史から国民史を切り取る近代の恣意性が様々に指摘される現在、歴史学としての日本史研究には、国民のルーツ探しを越えて、現代「日本」を相対化し問い直す多様な「日本」史の解明が求められている。このため渡来人研究にも、こうした新たな“現在の課題”に応えうる研究視点と、それに基づく実証的な研究の蓄積が必要となっていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、渡来人研究を、アジア史的視野のもと、日本古代社会の多様性・越境性並びに特性を捉える研究として鍛え直し、再構築することにある。そのために本研究では、「渡来」の語義である「移動」をキーワードに、「渡来人」を移住者ではなく、古代の「倭」「日本」への移動者と再定義し、実証的な検討からその有効性を明らかにしていく。この定義は、古代史料において、「渡来」が外から内への移動を示す語であること、また「新羅」「呉」などをと対置される内なる「倭」「日本」の存在を前提に「渡来」が記されていることなどを踏まえている。ここでの内なる「倭」や「日本」は、古代史料に即した枠組みであるから、現代の「日本」の枠組みとは異なっている。

3. 研究の方法

本研究では、「渡来人」を移動者と定義することが重要な前提となるため、最初に本研究における渡来人の定義と古代史料との対応関係を整理・確認した。その上で、国内外において関連史料の収集と分析を加えながら、5世紀～12世紀の移動者としての渡来人の実証的な研究を行い、国際社会の動きと、列島の政治的・社会的・文化的な動きが分かちがたく結びついていたこと明らかにし、渡来人を移動者と定義することの研究上の有効性を具体的に示すとともに、渡来人研究の射程を平安時代以降へと押し広げていくこととした。その具体的な研究項目は以下のとおり設定した。

- 「帰化」「渡来」の用語の史料論的検討に基づく渡来人の定義の確定。
- 百済との比較からみた倭国における中国系渡来人と五経博士の特質の解明。
- 「帰化」の渡来人の移配政策の実態の解明。
- 渡来商人の活動地域の広がり解明。

4. 研究成果

本研究は、コロナ禍による移動制限などによって、海外調査を予定どおりに進めることはできなかったが、当初設定した上記～の具体的な研究項目については、一定の目的を果たし得た。その成果を列記すると以下のようになる。

学術用語としての「帰化人」「渡来人」の語の適切性をめぐっては、『日本書紀』(以下『書紀』)の「帰化」の記事を史実として認めるか否かで、約半世紀も論争が続いている。そこで『書紀』の「帰化」「化来」記事について、「貢」「献」「遣」などの他の移動形態の表現と比較し検討した結果、推古紀以前(斉明紀以前の可能性もあり)の『書紀』の「帰化」「化来」は、原伝・原史料の「マウク」=「渡来」「来」伝承を、『書紀』編者が「帰化」伝承に改編していることが明らかとなった。また、史料の「渡来」は、「来」(マウク)を基本とする一般的な移動を示し、そこに多様な移動の契機が包含されうること確認した。7世紀前半以前の倭国は、渡来人を移住者として王権の組織に組み入れる場合、「帰化」であるか否かではなく、王権に有用な技術・技能を持っているか否かを重視していたとみられる。以上によって、渡来人を移住者に限定せず移動者と再定義することによって、史料実態に即した検討が可能となることを確認した。これらの分析結果の詳細は、論文『『日本書紀』と「帰化」(『古墳と古代国家形成期の諸問題』山川出版社、2019年10月)で公表している。

4・5世紀に中国東方へ移住した中国系渡来人の子孫に関して分析を行った。その結果、百済や高句麗では6世紀以降も中国系の姓がある程度継承されたのに対し、倭国ではそれが継承されていないことが明らかとなった。朝鮮諸国では姓に示される中国系知識人の「家」の文化をある程度維持する体制がとられていたのに対し、倭国ではそのような努力が払われなかったとみられる。その背景として、それぞれの地域の社会状況の違いだけでなく、朝鮮諸国・倭国と中国王朝との関係性の異なりが影響している可能性が想定された。

また、6世紀に百済から倭国に交替で渡来した諸博士も、その多くが中国的一字姓を持つ。これに関し、従来は、5世紀末から6世紀に百済が中国南朝と交流して得た中国の知識人を、あらためて倭国へ送ったものとする見方が有力であった。けれども、その多くも5世紀以前に百済に流入した中国系知識人の子孫の可能性が高いことが確認された。6世紀の百済渡来の諸博士には、中国出自の知識人を倭国へ送り、その外交政策に影響を与えて百済・倭両国の連携強化をはかる、5世紀以来の百済の対倭戦略の在り方が継承されていたと考えられる。このように渡来人は世代を越えて複数地域へ移動・移住し、東アジアの漢字文化を複合的につないでいたとみられる。またこうした「漢字文化」を共通の基盤とする、社会的・文化的な空間や地域性の差異に、国民史的な枠組みとは異なる、歴史実態としての政治・文化圏の重なり合う地域空間の実在を見出すことが可能だと考える。これらの研究結果の詳細は、主に「古代文献から読み取れる日本列島内の百済系・中国系移住民」(『百済研究』第74輯 2021年8月)で公表した。

律令国家における「帰化人」の移配地は、東国に大きく偏ることが知られており、従来、これは未開地東国の開発を目的としたものとの説明が加えられてきた。しかし、東国移配は唐令の影響を受けた雑令蕃使往還条に基づくもので、未開地開発説は再考を要すること、また律令的な受け入れ体制は天智王権による亡命百済人の受け入れを契機に徐々に整えられていったことなどを明らかにした。さらに、その過程で登場した百済王氏や難波の百済郡が基本モデルとなって、高麗王氏が登場し高句麗人を再移配した武蔵国高麗郡が成立したこと、その後「帰化」の新羅人によって置かれた武蔵国新羅郡も含め、「帰化人」の東国移配には、古代において対外的な西辺・東边防備を担う東国に対して中華国の威容を示す政策的意図があったことなどを指摘した。本研究の成果は主に「百済王氏と百済郡、高麗王氏・肖奈王氏と高麗郡」(『古代日本と渡来系移住民—百済郡と高麗郡の成立』高志書院、2021年3月)及び「七・八世紀の渡来系移住民」(『軍事と対外交渉』講座 畿内の古代学 雄山閣、2022年9月)において公表した。

平安・鎌倉期における国際交易と国内流通の結節点は、ほぼ博多に集約されていたというのが近年の通説的な理解となっている。一方で、古代末・中世前期に宋海商が南九州に到達していた可能性をつかがわせる考古資料の存在も指摘されている。そこで、渡来海商が南九州との交易にも直接かかわっていた可能性を探るために、日本と中国において類似性が指摘されている石塔の調査を行った。併せて、南九州の硫黄交易のあり方を記した軍記物語として注目されている『平家物語』の諸本の、「鬼界が島」(薩摩硫黄島)と外部との交通に関する記述を検討した。その結果、古代末・中世前期において、博多に来航した宋海商船のなかに、南九州を寄港地とし、そこから南島を目指し九州西岸海域を往還する船があった可能性が高いこと、また彼ら宋海商の中心は日本に拠点を築いた人々であったと考えられること、宋海商の交易活動を支援する日本の権門のなかに、博多や薩摩に寄港する彼らの船を物資や人の運搬船として利用するものもあったとみられることなどを明らかにした。以上の背景には、薩摩と南島を結ぶ航路が、一般国内航路とは比較にならぬ困難さを伴っており、外洋航海に長けた渡来海商の船が求められていたこと、また宋海商にとっても硫黄を含む南島交易は対日交易の大きな関心事となっていたことがあったと考えられる。以上の研究成果は主に「『平家物語』と薩摩塔 海商船と南九州」(『国立歴史民俗博物館研究報告』232、2022年3月)において公表した。

また、中国海商の活躍以前に東アジア海域において活躍していた新羅系交易者についても分析を加えた。その結果、8世紀中葉以降、史料において「帰化」と記されている新羅人の中に、交易者が多数含まれていることを実証的に確認した。従来の移民史研究としての渡来人研究は、「帰化人」研究を基礎としてきたが、本研究において渡来人を移動者と位置付け、渡来商人も分析対象に加えたことで、従来の渡来人研究や帰化人研究が論じてきた「帰化」の概念が古代の実態に即して相対化できると同時に、「移動」をキーワードとした渡来人研究の有効性を具体的に示すことができたと考えられる。この研究成果については、主に「新羅人の渡来 『日本書紀』『続日本紀』の記事を中心に」(『渡来・帰化・建郡と古代日本 新羅人と高麗人』高志書院、2023年5月)で公表した。

また当初設定した研究課題の他、移動する身体と定着する文化の関係性についても分析を加え、歴史社会の実態解明における渡来人研究の有効性・可能性を探った。そして、渡来人のもたらした個々の技術が、各技術の性質や、それを受容する社会状況によって、受容のあり方や定着に異なりがある事例をいくつか確認した。本成果については、「古代の武器・武具生産組織と渡来系技術・文化」(『古代武器研究』18、2023年12月)及び「渡来系のテヒトとフミヒト」(『月刊考古学ジャーナル』794、2024年4月)において公表することができた。

以上により、渡来人を移動者と広く捉え直すことによって、従来の渡来人研究が抱えてきた史料実態とのズレが修正されるだけでなく、世界史と密接不可分な日本史の多様性・重層性を実証的に明らかにする研究としても有効性があることを具体的に示すことができたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田中史生	4. 巻 74
2. 論文標題 古代文献から読み取れる日本列島内の百済系・中国系移住民	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 百済研究	6. 最初と最後の頁 43-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中史生	4. 巻 232
2. 論文標題 『平家物語』と薩摩塔 海商船と南九州	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 301-318
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中史生	4. 巻 2
2. 論文標題 百済王氏と百済郡、高麗王氏・肖奈王氏と高麗郡	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本高麗浪漫学会監修、須日勉・荒井秀規編『渡来文化研究2 古代日本と渡来系移住民 百済郡と高麗部の成立』高志書院	6. 最初と最後の頁 11-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中史生	4. 巻 4
2. 論文標題 倭王権における百済移住民の役割	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 海外百済文化財資料集(日本の中の百済 本州・四国地域)	6. 最初と最後の頁 408-428
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中史生	4. 巻 22
2. 論文標題 屯倉と韓国木簡 倭国史における韓国木簡の可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 木簡と文字	6. 最初と最後の頁 137-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中史生	4. 巻 18
2. 論文標題 古代の武器・武具生産組織と渡来系技術・文化 雑戸籍を手がかりに	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 古代武器研究	6. 最初と最後の頁 83-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中史生	4. 巻 794
2. 論文標題 渡来系のテヒトとフミヒト 渡来系の技術と技術者の多様性を考える	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 月刊 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 15-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中史生	4. 巻 3
2. 論文標題 新羅人の渡来 『日本書紀』『続日本紀』の記事を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本高麗浪漫学会監修、須田勉・高橋一夫編『古代渡来文化研究3 渡来・帰化・建郡と古代日本』高志書院	6. 最初と最後の頁 9-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 田中史生
2. 発表標題 9～10世紀日本の東アジアとの交流
3. 学会等名 日本考古学協会2022年度福岡大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中史生
2. 発表標題 文献からみた古墳時代中期と東アジア
3. 学会等名 中国四国前方後円墳研究会 第25回研究集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中史生
2. 発表標題 文献からみた古代の武器・武具生産組織と渡来系技術・文化 雑戸籍を手がかりに
3. 学会等名 第18 回古代武器研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中史生
2. 発表標題 秦氏と宗像の神 「秦氏本系帳」を手がかりとして
3. 学会等名 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 特別研究事業成果報告会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中史生
2. 発表標題 古代文献から読み取れる日本列島内の百済系・中国系移住民
3. 学会等名 韓国忠南大学校百済研究所学術大会「百済定着の外国人と百済系移住民の交流」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中史生
2. 発表標題 九州における渡来人と信仰 ヒメコソ・玉女・薩摩塔
3. 学会等名 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺跡群特別研究事業 第2回国際検討会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中史生
2. 発表標題 越境する身体と 日本 日本古代史研究から
3. 学会等名 早稲田大学 SGU 国際日本学拠点 総括シンポジウム
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 吉川真司、田中史生他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 332
3. 書名 軍事と対外交渉	

1. 著者名 千賀久・亀田修一・田中史生・朴天秀	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 333
3. 書名 渡来系移住民 半島・大陸との往来	

1. 著者名 田中史生・青木勘時・青木敬・池ノ上宏・一瀬和夫・市村慎太郎・伊藤聖浩・犬木努・入江文敏・上田睦・上野祥史・太田宏明・大谷晃二・岡林孝作・小栗明彦・小栗梓・加藤謙吉・河内一浩・岸本直文・木下亘他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 455
3. 書名 白石太一郎先生傘寿記念論文集編集委員会編『古墳と国家形成期の諸問題』	

1. 著者名 田中史生・金子修一・荊木美行・河内春人・葛継勇・巖苺薫・中野高行・浜田久美子・篠崎敦史・野田有紀子・菊地大・榎本淳一・江川式部・侯振兵・速水大・岡崎裕子・石見清裕・河野保博・澤本光弘	4. 発行年 2020年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 557
3. 書名 金子修一先生古稀記念論文集 東アジアにおける皇帝権力と国際秩序	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------